

派遣者番号	R5K23	氏名	山口 秋音
研究主題 —副主題—	美術教育とアートの架橋に関する研究 —社会関与を意図するアートの動向とアーティストが用いるリサーチの手法を手がかりに—		
派遣先大学	東京学芸大学	指導担当者	笠原 広一
所属	稲城市立向陽台小学校	所属長	鈴木 浩之

キーワード：美術教育 アート

**要旨：** 本論の目的は、美術教育の観点からアートの価値を捉え直し、美術教育とアートの架橋を図ることによって、社会と関わる美術教育の枠組みを描き出すことである。そして本論は、①社会と関わる美術教育にはどのような価値があるのか。②その価値はどのような手法によって実装可能となるのか。③美術教育とアートを架橋することは子供たちにとってどのような価値があるのか。この3点を問うた。

そのために本論では、美術教育とアート、社会の今日的状況を踏まえた上で、社会関与を意図するアートの動向を考察し、美術教育に固有な価値とその逆説を明らかにした。また、その価値を実装するための方策を探るべく、日本の美術教育における認識変容をめぐる課題を考察し、アーティストが用いるリサーチの手法に着目するに至った。そして、美術教育に固有な価値の実装はリサーチの手法の援用によって可能となるということを明らかにした。さらに、子供たちが社会と関わり合いながら主客の統合を図り、自身の認識に変容を生むことができるという意味において、美術教育における学びの主体である子供たちにとっても価値があるということを明らかにした。

# 美術教育とアートの架橋に関する研究

—社会関与を意図するアートとアーティストが用いるリサーチの手法を手がかりに—

山口 秋音

## 1 研究の背景

様々な課題が重層的に存在する現在の社会において、私たちは多義的な位置にあり、自分たちの認識をつくり変えながら生きていく必要があると考えられる。そのような複雑化した社会を背景として「社会に開かれた教育課程」が謳われ、社会に向き合い関わり合う資質・能力を育むことは、図画工作・美術科全体に求められている。一方アートの文脈では、社会関与を意図した実践が活発に取り組まれている。更に、美術教育に隣接する学問領域では、複雑化した社会におけるアートの価値が言及されている。それにも関わらず、現在の美術教育においては社会との関わりが十分になされていないのである。このような状況は、美術教育とアートの接続が図られていないことに由来すると考えることができる。

## 2 研究の目的と問い

本論は「美術教育の観点からアートの価値を捉えなおし、美術教育とアートの架橋を図ることによって、社会と関わる美術教育の枠組みを描き出すこと」を目的とした。そして、「①美術教育とアートを架橋することによって描き出される、社会と関わる美術教育にはどのような価値があるのか」、「②その価値はどのような手法によって実装可能となるのか」、この2点を問うた。なお、第3章において「③美術教育とアートを架橋することは子供たちにとってどのような価値があるのか」という新たな問いに出会うこととなった。よって、3点目の問いについても考察を行った。

## 3 結論

問いに応答するために、本論では美術教育とアート、社会の今日的状況を踏まえた上で、社会関与を意図するアートの動向を考察し、社会関与を意図する美術教育に固有な価値とその逆説（【人や社会の認識変容】【私】を介する表現】【社会的な逸脱】【価値の遡行性、非目標志向性）を導き出した。また、その価値を実装するための方策を探るべく、日本の美術教育における認識変容をめぐる課題を考察し、アーティストが用いるリサーチの手法に着目するに至った。そして、アーティストが用いるリサーチの手法および制作過程を分析・考察し、リサーチの手法を、テーマやモチーフに関する文献・資料などの客観的事実や、場所や環境、他者の語りなどの客観的事象に対して、個人的な経験や感情、固有の疑問や関心などをもつ「私」を介してアプローチすることによって主客の統合を図り、自分自身に新たな認識を形成したり、これまでの認識を変容させたりすることと定義した。そして、美術教育に固有な価値の実装はリサーチの手法の援用によって可能となるということを明らかにした。さらに、美術教育とアートを架橋することは、子供たちが社会と関わり合いながら主客の統合を図り、自身の認識に変容を生むことができるという意味において、美術教育における学びの主体である子供たちにとっても価値があるということを明らかにした。

以上のように、本論では美術教育の観点から社会関与を意図するアートの価値を捉え直し、社会関与

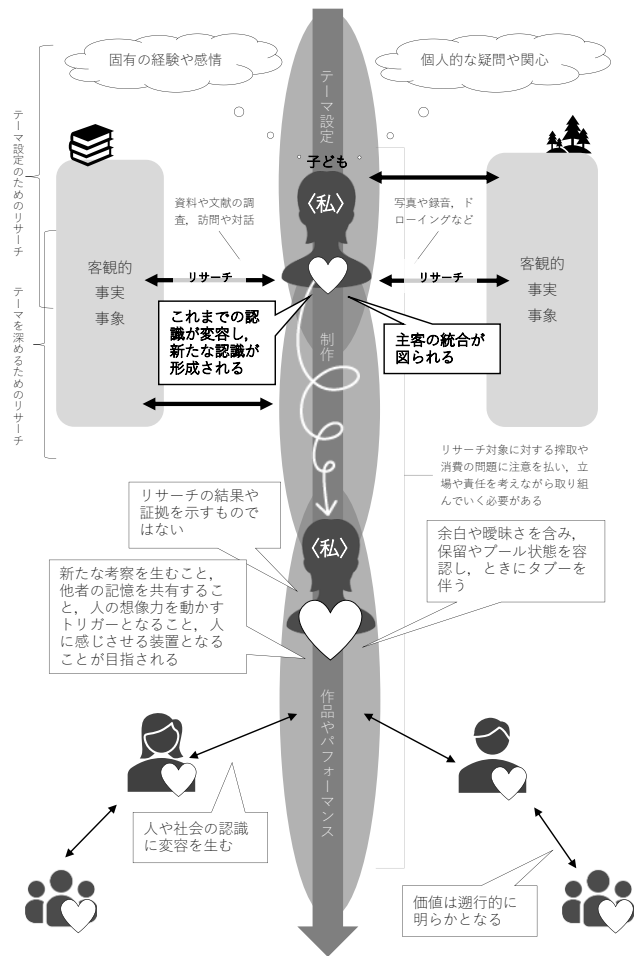
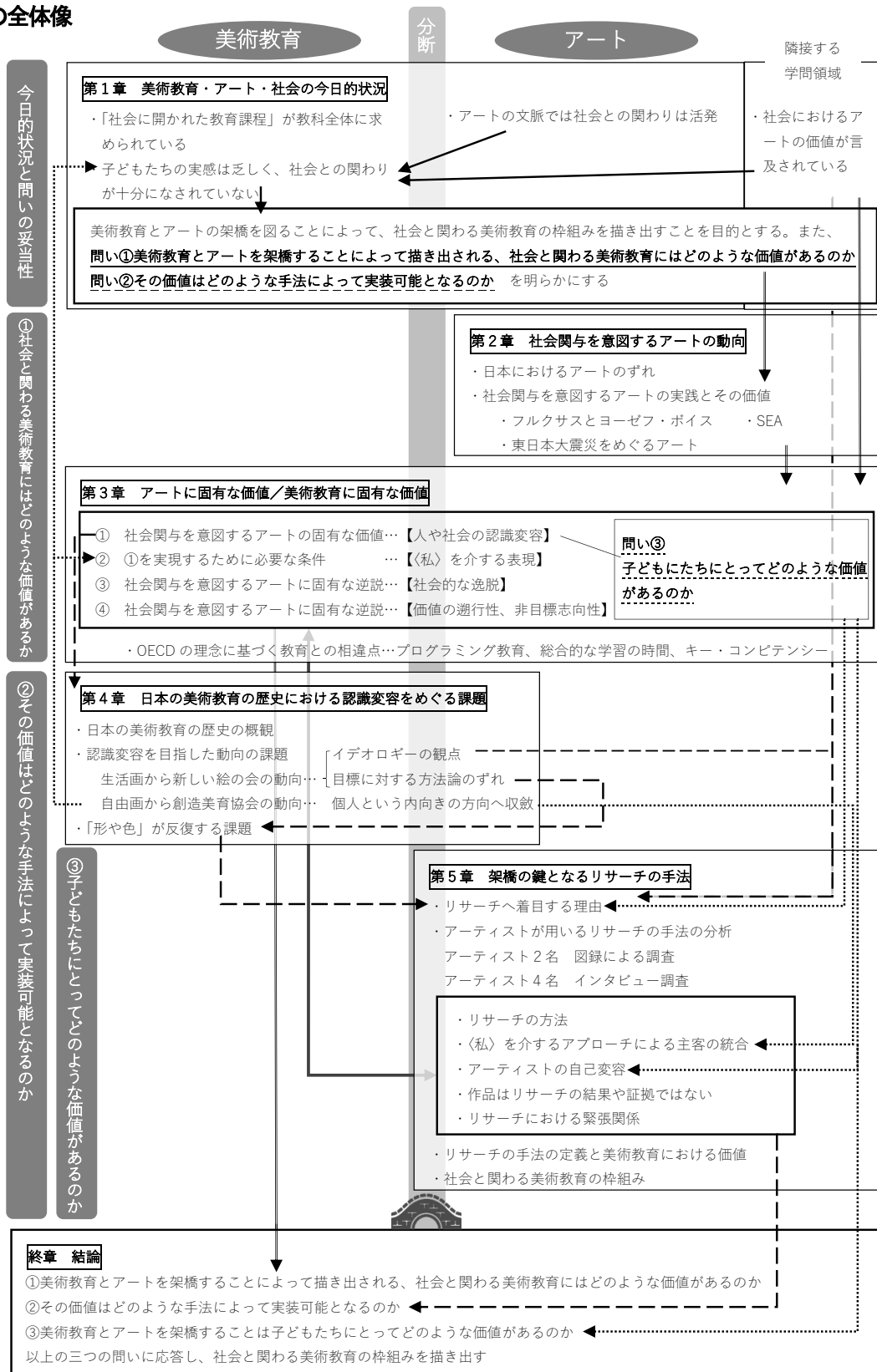


図1 社会と関わる美術教育の枠組み

を意図する美術教育に固有な価値を導き出した上で、アーティストが用いるリサーチの手法を定義づけることによって、社会と関わる美術教育の枠組みを描き出したのである。

#### 4 研究の全体像



#### 5 主な参考文献

神野真吾 (2018) 「美術教育と美術/アート」, 神林恒道 ふじえみつる 監修『美術教育ハンドブック』, 三元社, pp. 166-175  
 金子一夫 (2012) 『美術科教育の方法論と歴史 [新訂増補]』, 中央公論美術出版 他